

「音楽の学習はどうしたらいいですか」



① 歌唱

指導用のCDなどは、歌声や旋律、伴奏が重なり合っているため聞き分けることが困難です。旋律のみをピアノなどで弾いたり、先生が実際に歌ったりすることで聞き取りやすくなります。また、デジタル教科書などで歌に合わせて楽譜の色が変わるなどの提示があることでどの部分を歌っているかが捉えやすくなります。歌い始めは、先生が視覚的に合図を出すことで安心して歌い始めることができます。

ただし、正しい音程で歌うことは、難聴児にとって補聴器や人工内耳を装着していても、その機械の特性上困難な場合が多いです。歌唱に対する抵抗感や疎外感をもち、「音楽は苦手」という意識につながることも多いようです。努力や指導方法だけでは難しい部分なので、周囲の先生や子どもたちの理解が必要です。

合唱コンクールでは、歌う位置を事前に相談できるとよいです。「ピアノの音を頼りに歌うので、ピアノの近くにしてほしい。」「指揮者がよく見える位置にしてほしい。」など歌いやすい位置は様々です。また、補聴援助システム（ロジャーやミニマイクなど）を使う場合には、マイクをピアノの近くに置いてもらう、歌が上手な友達にお願いしてマイクをつけてもらって聞こえてくる音を頼りに歌うなどの例もあります。



② 鑑賞

音源だけでなく、映像と一緒に提示することでイメージが持ちやすくなります。映像内容はオーケストラなどが演奏する様子や風景など曲によって様々です。インターネットの動画でも指導内容に合うものがあれば、授業だけでなく家に帰ってからタブレットなどで繰り返し見ることもできます。鑑賞する前にあらかじめ出てくる用語などを説明し、内容や注目するポイントを確認しておくことで効果的に鑑賞することができます。そうすることで、鑑賞後の感想の記入や発表などがスムーズに進められることが多いです。

ロジャーマイクの外部入力に、専用端子でテレビや音楽プレイヤーをつなぐと音質良く聞こえます。補聴器や人工内耳にも、直接端子で外部入力に接続することができます。これらを利用して音楽を聴くことを楽しむ難聴児もいます。正確な音程を求めるよりも歌うことを楽しんだり、好きな音楽を聴いたり、その子なりに音楽を楽しめると良いと思います。

聞こえ方は一人一人違いますので、本人や家庭と学校がよく話し合っ
て子どもに合った対応を一緒に考えていけるとよいでしょう。

③ 器楽

難聴児にとって、拍を一定の速さで保持しながら演奏することは、大変な苦
労が伴います。合奏の場合、打楽器は視覚的にリズムも捉えやすく、叩いた振
動から響きも感じやすいですが、「聞こえにくい＝打楽器」ではなく、どの楽
器に挑戦してみたいか、どのような支援があると演奏しやすいかなど、話
し合っ
て決めることが望ましいです。

小・中学校でリコーダーの学習がありますが、小学校で扱うソプラノリ
コーダーは音域が高く、難聴児には困難な楽器の一つです。正しく運指が
できても、音が聞き分けられない場合があるので、どの音まであれば聞
き分けることができるか確認し、聞き分けのできる音域の教材やパート
で演奏することで抵抗感を軽減できる場合もあります。

聞こえにくいことから拍感や拍への意識をもつことが難しいですが、幼
少時から地域の聴覚障害者向けの和太鼓サークルに入り、活動している難
聴児もいます。その子どもたちの中には、拍を一定の速さで刻むことが
でき、大体のリズムは正確に表現できる様子も見られます。幼少期から
の経験によって、拍への意識が身についている難聴児もいます。「聞
こえないからできない、難しい。」ではなく、時間をかけてゆっくりと
育てていく場合もあるので、子どもたちの興味に寄り添い、一緒に楽
しむ時間を大切にしていけるとよいと思います。

